

一、楊誠齋が芍藥宅の詩

近年艸花の壽長からん事を謀て、牡丹・芍藥及菊花の類、多く桐油紙等を以て覆ふ事あり。是を花宅と稱すべし。たま〜楊誠齋が芍藥宅の詩を看てこゝに記す。花宅の稱奇なるかな。

芍藥宅風雨收花。芍藥花宅。上棟下宇。瓦之類。皆以桐油。皆以油。皆以油。 楊廷秀

何以筑花宅。筆直松樹子。何以葢花宅。雪白清江紙。紙將碧油透。松作畫棟峙。鋪紙便成瓦。瓦色水晶似。金鴉暖未燭。銀竹響無水。汗容漬不泣。晴態嬌非醉。盡收香世界。關在閑天地。風日幾曾來。蜂蝶獨得至。

勸春入宅莫歸休。勸花住宅且小留。昨日花開開一半。今日花飛飛數片。留花不住春竟歸。不知折挿瓶中看。

一、司馬光が以無從者不赴會の詩

都鄙にいふ事有り、有駕無昇者、むかし洛陽眞率會に、司馬公以無從者不赴會その詩に云。

安之以詩二絶見招。作眞率會。光以無從者不及赴。依韵和呈。

君 實

眞率由來無次序。經旬踰月不爲稀。藍輿但恨無人舉。坐

想紛々醉落暉。

盃盤豐腴勝陶令。園沼繁華減白家。惆悵佳辰掩蓬華。不陪高會賞鄰花。

一、中華の黄金古多くして今少し

中和古多くして今少きものあり。本邦今多くして古少きものあり。黄金是也。漢王莽敗時。省中黄金二十萬斤。陳平四萬斤。閻楚。董卓鄠塢金亦多。其餘賜三五十斤者。不可勝數。近世金不以斤計。雖人主未有以百金與人者。何古多而今少也。鑿山披砂無虛日。金爲何往哉。頗疑寶貨神變不可知。復歸山澤耶。見仇池筆記。集二十五

一、櫻町天皇の御製

當今御名照仁御歳十六。御製一首、田家の煙と云題。

烟たつたみのかまどの賑ふときくを我身の楽しみにして

一、請俸の字義

請俸寫來手自校。子孫讀之知聖教。嚮及借人爲不孝。杜遠聚每卷後理云。愚意請俸二字義如何。

一、讀書百遍義理自通の故事

俗語に讀書百遍義理自通といふ。此語來歴あり。

董遇有從學者。遇不肯教。而云。必當先讀百遍。其義自見。

從學者苦渴無日。遇言。當以三餘。或問三餘之意。答曰。

冬者歲土餘。夜者日之餘。風雨者時之餘。三國志註 隨處讀書。

錢思公雖生長富貴。而少所嗜好。在西洛時。嘗語寮屬言。

平生惟好讀書。坐則讀經史。臥則讀小說。上廁則閱小詞。

蓋未嘗頃刻釋卷也。謝希深亦言。宋公庠同在史院。每走廁。

必狹書以往。諷誦之聲琅然聞於遠近。其篤學如此。余因謂。

希深曰。余平生所作文多在三上。乃馬上枕上廁上也。蓋惟

此尤可以屬思焉。歸田錄

一、輪島の船、朝鮮に漂着の事

今茲秋七月能州輪島の船一艘、大風に漂流朝鮮國へ令着岸

候。仍之對州人、在大坂留守居役中川四郎五郎來狀に、御

領分能州鳳至郡輪島町二十三端帆船頭傳九郎と申者、水主

共に拾四人乗組米を積み、爲商賣大坂へ志し、七月九日輪島

出帆、數日乘流。同十七日長州津嶋を見懸候處、南風にて

風波強く洋中に漂居、同十八日南風彌烈しく、其上霧深く罷

成候に付、柱を切掛候處、霞の間山見懸候故乘懸候へば、

沖手に飛瀬有之、及破船候に付、傳馬に取乗り灘に漕寄

可申と仕候處、傳馬を打返し拾四人の者共散々に罷成。其

節水夫の内勘四郎・七右衛門と申もの溺死いたし、殘拾二

人もの共傳馬或は船板に取付、朝鮮國慶尙道の内長馨と

申前へ漂着仕り別條無之旨、彼國に指置候對馬家來より、

對州案内申越候に付、對州へ到着次第使者相附、御當地御

奉行所へ送届候筈に御座候。依之於江戶表御老中様へ承

届、御案内申上候に付、於此表町御奉行所へ御届可申上

旨、國元家老共より申越候に付、今日町御奉行所御月番様

へ罷出で、右の趣御案内申上候。此段爲御知申上候。

九月十七日

一、土方勤兵衛と太田但馬

土方勤兵衛頼雄と太田但馬守長知は實兄弟にて、兩人とも

瑞龍公御爲にはいとこの御續と申事は、舊記に粗見えたり。

勤兵衛母儀は芳春院大夫人の姉にて、勤兵衛幼年の内其父

病死、依之太田孫左衛門と申人へ再嫁有之、太田但馬出生

也。異父兄弟也。此母儀死後松長院賀屋壽桂と號すと云。

一、人皆成於手。我獨成於心。

梁斐子野爲文典而速。不尙靡麗。或問其爲文速者。子野答